2018 年度イラン短期研修報告書

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程
岡部　友樹

1. 研修の概要

2018 年 12 月 20 日～30 日に行われた第 3 回イラン短期研修は，イラン外務省付属の国際関係学院（School of International Relations：以下 SIR）[1]をカウンターパートとして，イランの政治・外交・経済に関する講義，官庁への訪問，地方都市視察を中心としたプログラム構成であった．2019 年に日本―イラン外交関係 90 周年を迎える両国は，政治・経済・文化的な交流を通じて良好な関係を築いており，本プログラムはそのような関係の更なる発展に寄与する人的交流の一環として両国の学生が日々を共にした．以下では本研修のうちの重要だと思われるプログラムのいくつかを紹介する．

2. イランの政治・外交・経済に関する講義

研修の前半に行われたイランの政治・外交・経済に関する講義は全 4 回あり，SIR とテヘラン大学にて行われた．その内容は多岐にわたり，イランの元駐日本大使から見た日本のすがた，イランのエネルギー政策，イランの核政策，そしてグローバル・ガバナンスといったものであった．また，講義の形式はとらなかったものの，SIR 付属のアーカイブでは所蔵されているカージャール朝以来の文書資料に関する説明を受けた．各々の講義から学ぶ点は大変多く，そのなかでも筆者の印象に強く残った①イランのエネルギー政策と②核合意に関して，講義の内容とそれに関するコメントを記す．

1 つ目は，アリー・シャムス・アルデカーニー教授によるイランのエネルギー政策の講義である．本講義は，近視眼的な時事問題の解説ではなく，巨視的な歴史観をもって，イラン／ペルシアという土地に潜在する「エネルギー」それ自体を再考させるような内容をお話しいただいた．筆者がイランからすぐに想像したのは核エネルギーの話であったが，アルデカ

[1] 国際関係学院の HP によれば，政治・外交のプロ集団を育てる教育機関の先駆けは，カージャール朝第 5 代君主のモザッファロッディーン・シャーの治世下の 1899 年（A.P. 1278）に立憲革命に初代首相となるミールザー・ホセイン・ハーン・ムシェール・ムルクが開いた「政治学院（Political School）」だという．この政治学院の流れを汲んで，1982 年に国際関係学院が創設されたという．c.f. 国際関係学院 HP（http://www.sir.ac.ir/），Abrahamian [2008: 45-49].

ーニー教授の講義を受け，太陽光や風力などの「再生可能エネルギー」にも目を向ける必要性を感じた．というのも，テヘランなどの大都市では大気汚染が問題化しており，それに対する市民の抗議も発生している．このような状況は再生可能エネルギーの利用の促進をイラン政府に迫っており，アメリカの経済制裁による外国企業が投資をするうえで不安定な状況下ながらも，すでに各国が太陽光発電や風力発電のさらなる導入をもちかけてきているという（Burlinghaus [2017]）．

2 つ目は，セイド・ホセイニー・サーダート・メイダーニー氏によるイランの核合意に関する講義である．1980 年～1988 年のイラン・イラク戦争以来，「戦略文化」として防衛装備を増強させるイランにとって，核開発の問題が国際社会の矢面に立ったことは，欧米の注意を促す結果となり，多数の試練を強いてきた．メイダーニー教授は国際法を専門とされ，国連安保理決議 2231 号により承認された「包括的協同行動計画（Joint Comprehensive Plan of Action: JCPOA）」の意義や，昨今のそれに対するアメリカの離脱と単独での制裁開始に関して説明をされた．イラン・イラク戦争後の国連による不十分な対応から，イラン政府は国際法や国連の権力に対して懐疑的であった点を指摘する論者もいるが（Tabatabai and Samuel [2017]），メイダーニー教授の説明のなかではむしろ国際法に則った紛争解決手続きによりアメリカを糾弾するという姿勢が印象的であった．

3. 地方都市視察

前半のテヘランでの講義を終え，テヘランから南に向かい，車で 6 時間弱の位置にあるエスファハーンとカーシャーンを訪れた．

まず，エスファハーンではマスジェデ・イマーム，マスジェデ・シェイフ・ルトフォッラー，アーリー・ガープー宮殿，マスジェデ・ジャーメ（写真②参照），アルメニア人のヴァーンク教会（写真③参照）などの宗教施設を中心に回った．エスファハーンのバーザールでは，モフセン・マフマルバーフ監督の映画のタイトルにもなっている草木染絨緞「ギャッベ」を購入した．この絨緞はカシュガーイー族などのイランの遊牧民によって織られることで知られ，ペルシア絨緞の多様性を知る機会となった．また，エスファハーンの街並みもさることながら，庶民の食文化にも触れることができ，「ジェギャル」とよばれるレバーの串焼きを町はずれのレストランで食すことができた．

次に，エスファハーンを後にしてカーシャーンに移った（写真④を参照）．カーシャーンでは名士の邸宅を改装したホテルに滞在し，落ち着いた雰囲気のなかで過ごすことができた．カーシャーン最終日に訪れたとあるバーザールを歩いていると，バーザール内にエマーム・ザーデ（墓碑のうえに建てられた廟）を見つけ，シーア派の聖者崇敬が隅までいきわたっている印象を受けた．また，カーシャーンでもイランの食文化を体験することができ，イランのアイスクリーム「ファールーデ」や，地域的な特徴をもつ「クフテ・タブリーズィー」などを食すことができた．

4. おわりに

全日程を通じて, SIR の学生の方々からの温かなサポートを受けました．また，地方都市への移動の車中や，名士の邸宅を改装したホテルの中庭などでは, SIR の学生の方と様々な話題に関してざっくばらんな議論にお付き合いいただきました．重ねて感謝申し上げます．そして今回の短期研修を企画・援助していただいた笹川財団のみなさま，イランにてお世話になった SIR の関係者のみなさま，在イラン日本大使館のみなさま，現地コーディネーターの穴田慶子さまに感謝申し上げます。

参考文献

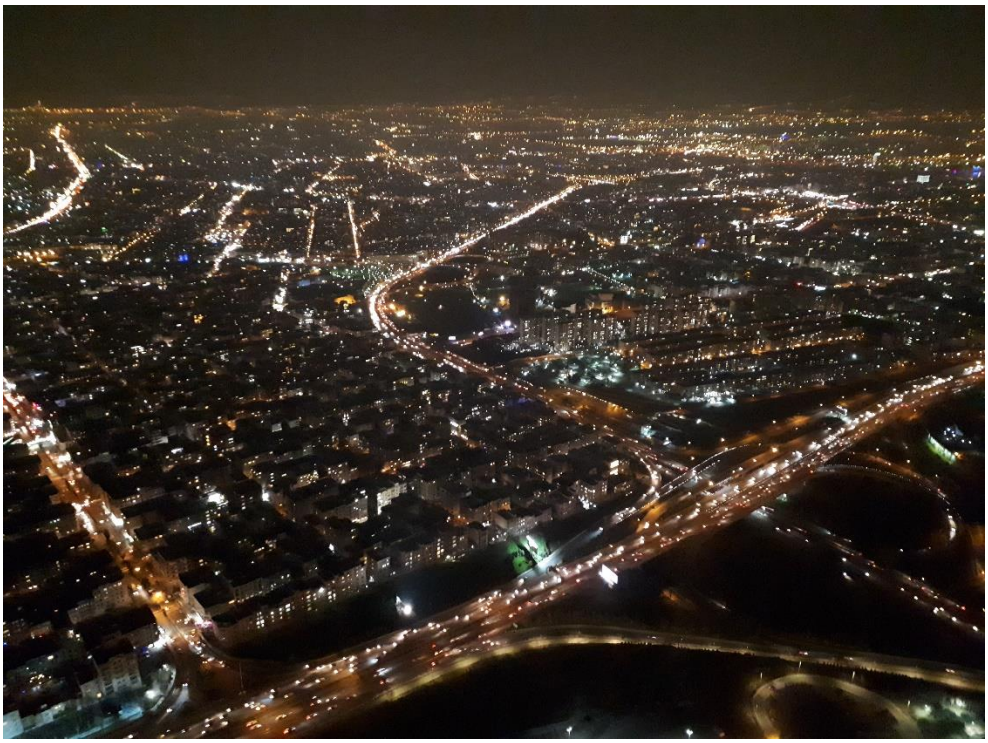
Abrahamian, E. 2008. *A History of Modern Iran*. New York, NY: Cambridge University Press.

Burlinghaus, E. 2017. The Other Green Movement. *Foreign Affairs* (April 27, 2017), https://www.foreignaffairs.com/articles/iran/2017-04-27/other-green-movement（最終閲覧日：2018 年 1 月 30 日）

School of International Relations (SIR), http://www.sir.ac.ir/（最終閲覧日：2018 年 1 月 30 日）

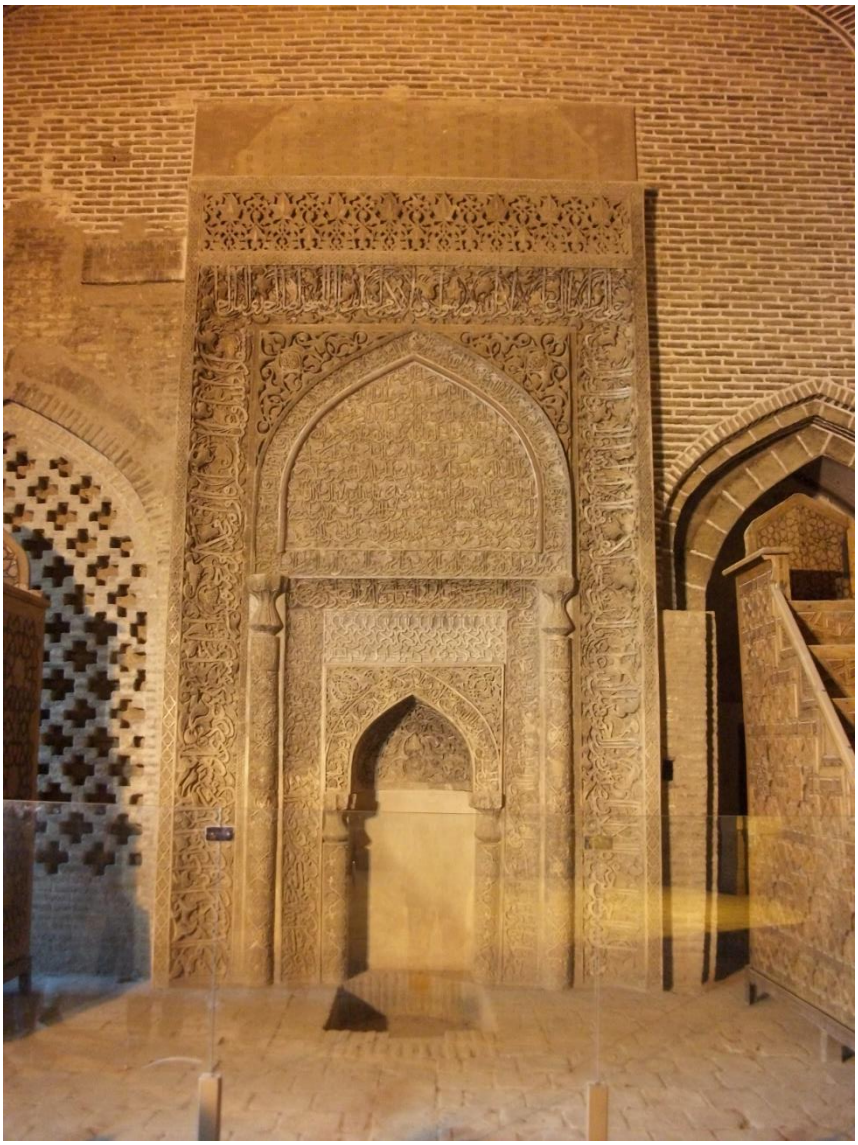
Tabatabai, A. M. and Annie Tracy Samuel. 2017. What the Iran-Iraq War Tells Us about the Future of the Iran Nuclear Deal. *International Security*, *42* (1), 152-185.

写真①



ミラード・タワーから望むテヘランの夜景

写真②



マスジェデ・ジャーメの北西エイヴァーンにあるイル・ハーン朝君主オルジェイトゥのために作られた礼拝堂のミフラーブ@エスファハーン.

写真③

クリスマスツリーが飾られた，エスファハーンのジョルファー地区にあるアルメニア人のヴァーンク教会（アルメニア使徒教会）.

写真④

カーシャーンのモスク.